

知 識 探 訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

「タマン・ヌガラ国立公園」にみる自然保護と開発

河合文 (千葉大学大学院人文公共学府特任研究員)

マレーシアの観光地として有名な「タマン・ヌガラ国立公園」が植民地時代の歴史と関係することは、あまり知られていない。マレーシア独立以前、この公園は「ジョージ 5 世国立公園」と呼ばれていた。その元となった野生生物保護区は、ゴム・プランテーションの拡大などをうけて制定されたもので、英国王の名にちなんでジョージ 5 世国立公園と命名された。なお、マレー語で「国の公園」を意味する「タマン・ヌガラ」は、「国立公園」と記されることが多いが、法律上は、パハン、クランタン、トレンガヌの 3 つの州の州立公園の集合体である。



クランタン川上流を歩くオランアスリ (筆者撮影)

タマン・ヌガラでは、トレッキングやオランアスリ(先住民)を訪問しての吹矢体験を楽しむ事ができる。公園の一般人の利用は規制されているが、オランアスリは例外とされている。マレーシアで

は、オランアスリが「唯一昔からタマン・ヌガラを利用してきた人々」とみなされる傾向があるが、クランタン州のタマン・ヌガラには、オランアスリではなく、マレー人の果樹園跡があるのだ。

果樹園跡は、オランアスリの間で「ト・ガジャの果樹園」と呼ばれており、名前の由来は 19 世紀末の事件に遡る。3 州のなかで最初に植民地化されたパハン州では、地方権力者が植民地政府の介入に対して反乱を起こした。政府軍に追われた彼らは、パハン水系をさかのぼり、非植民地であったクランタン州、トレンガヌ州へ逃走し、最終的にはシャム(タイ)へ逃亡したといわれている。パハン水系、クランタン水系、トレンガヌ水系間の山越えルートを含むタマンヌガラはその逃走劇の舞台だったのであり、「ト・ガジャ」は反乱軍メンバーの名前なのである。

現在ト・ガジャの果樹園は、オランアスリがドリ

ンを採集するのみで、マレー人が利用することはない。しかしなぜ、近くに暮らしているわけでもないマレー人の果樹園跡がここにあるのか、という疑問が残る。

実は 20 世紀初頭まで、この一帯ではマレー農民が稲作を営んでいた。公園制定によって彼らの区域内利用は法的には禁止されたが、第二次大戦中にはマレー人がこの辺りまで避難していた。けれども戦後、こうした奥地に暮らすマレー人が「共産主義ゲリラ撲滅」のために移住させられた結果、公園とその周辺にオランアスリが取り残されたのである。

マレーシア独立後、オランアスリが利用していた森林から木材の切り出しが進んだ。マレーシア産の木材は高度経済成長期の日本へも輸出され、拓かれた土地にはゴムやアブラヤシが植えられていった。同様に他の「南」の国々でも森林伐採が進められた結果、今日では熱帯森林の希少性が世界的に認識されるようになっている。

マレーシアでは、現在もアブラヤシ・プランテーションの開発が続いている。果実が油脂原料として利用されるアブラヤシは、一度植えると 20 年以上は実を収穫できる。シーズン毎に作付けが必要な大豆等の他の原料と比べ、生産コストを低く抑えられるのだ。さらに、中国、インド、欧州における需要の高まりが、パーム油市場の拡大に拍車をかける。人口増加や食習慣の変化をうけた消費の増加、さらには動物油脂より「健康的」とされる植物油脂を求める風潮がその背景にある。

クランタン州奥地まで広げられてきたアブラヤシ・プランテーションは、タマン・ヌガラ国立公園に接するようになった。その姿は、「生物多様性を誇るマレーシアの森」が、森林開発とともに形成されてきたという、パラドクスを示しているかのようである。

< 執筆者プロフィール >

1983 年、沖縄県生まれ。千葉大学大学院人文社会科学科博士課程修了(学術博士)。2010 年よりクランタン州のオランアスリを対象に人類学的調査を行う。環境の利用と認識、環境と開発、「先住民」と国家といったテーマについて研究している。